

## 事件は現場で起こる —『科学史の事件簿』科学朝日編—

科学技術立国がいかに建前かは、『自然』(1946-84年)『科学朝日』(1994-2000年)といった優れた科学雑誌がなくなり、科学テレビ局がいつの間にか総合局に変身(テレビ東京)したことで分かる。私たちは科学技術の恩恵を受け生活している一方、科学そのものにはあまり関心が無い。最新科学の多くは理解し難い魔術にも見える。科学専門特化は凄まじい。情報もネット化で、啓蒙的科学雑誌は風前の灯か？(菊地実)

### 科学的真実の嘘誠

一昔前、「科学的イデオロギー」を絶対真実とする政党もあった。まあ信仰か酔っ払い。近刊の『Science fiction』(2024年/ダイヤモンド社)を読むと、多くの心理学・行動学・医学・新薬発表が眉唾か根拠薄弱。反ワクチンのように現実には大きな被害をもたらした「デマ」も少なくない。革新的発見発明は必ずしも一人ではなく、多くの人が関わる。微積分のようにニュートン/ライプニッツ論争のような手柄争いも少なくない。また二十世紀までの物理学主流から高分子化学、バイオ、情報、複雑系と流行もある。さらに多くの先端科学は仮説に基づく新しい観測データで、大半は消え去るか修正される。

今回紹介する本は『科学朝日』連載。表題からしてホームズ物風で、ジャーナリスティック。二十四の事件簿

### ＜図表1＞本書の目次

疑惑にかすんだクローンマウスの「父」—カール・イルメンゼー  
ノーベル賞受賞直後の亡命劇—エンリコ・フェルミ  
ピルトダウン人事件の共犯者？  
—ピーエール・ティヤール・ド・シャルダン  
苦痛を愛した外科医—フランソワ・マジャンディ  
師デーヴィとの愛憎—マイケル・ファラデー  
幻に終わった放射線「N線」—ルネ＝プロスペル・ブロンロー  
進化論のプリンスの「受難」—スティーブン・ジェイ・ゲールド  
「原子論」の悲劇の闘士の死—ルートヴィヒ・ボルツマン  
占星術撲滅宣言が招いた反発—パート・J・ボーク  
ノーベル委員会への公開質問状—ドミニク・ステーリン 他



＜朝日新聞出版＞

にはフロイトとユングの愛憎と決別。カルト信者に祭り上げられているニコラ・テスラの栄光と没落の如く、安手ハリウッド映画で流布している有名噺もある。話題の映画『オープンハイマー』で紹介された核物理学から原爆開発に関係した伊フェルミ(フェルミ推定、夫人がユダヤ系)のノーベル賞授賞式からの劇的な亡命。アインシュタインと原子爆弾といった話題も興味深い。

### 幻のN線発見

逆にあまり知られてない事件もある。ルネ＝プロスペル・ブロンローの＜N線発見＞である＜図表2＞。

ブロンロー(1849-1930年)は、パリ大学卒ナンシー大学の実験物理学者。電磁波速度測定で「光速に

＜図表2＞新しい放射線発見

| 名称                | 発見年                 | 発見年          | 媒体        | 備考  |
|-------------------|---------------------|--------------|-----------|---|
| X線                | 1895年               | コンラート・レントゲン  | 放電管       | 物質を投下した感光作用（レントゲン撮影）  |
| —                 | 1896年               | アンリ・ベクレル     | 蛍光物質（ウラン） | 未知の放射線  |
| ①α線<br>②β線<br>③γ線 | 1898年<br>↓<br>1899年 | アーネスト・ラザフォード | ウラン       | ・ウランから2種類の放射線が出ていることを発見し、<br>①②を命名<br>・③はヴィーラールが発見し、<br>ラザフォードが命名 |

＜本書を元に作成＞

等しい」と成果を挙げ、同郷数学者ポアンカレも絶賛。社会的大事件として報道されたX線発見で、早速速度と偏光性を観測しようところみた。「当時、X線が電磁波であるという認識はなかった」（60頁）。この出発点が大間違いの元で、十九世紀はエーテルという、まだ見ぬ物質を追い求めている。

ブロンローは放電管から出ている放射線を新しい（nouveau）N線とした。これは故郷ナンシーにもちなんでいる。他学者も追従してN線はブームとなり、N線は＜筋肉、ついで神経系から放射され、精神現象＞とも関連づけられた。マリー・キュリーのような大物理学者でさえ、未知の放射線予測が否定された。問題はN線が拡大解釈され、世紀末、心理学や「超常現象」と結び付けられた。1904年ブロンローは科学アカデミーからル・コント賞＋賞金五万フランを受け、N線論文をまとめた。この本は英訳されて旧制一高蔵書にもあり、「アンダーラインがところどころ引かれている」（65頁）。本出版時がピークで、懐疑論否定論が噴出した。実験で再現できない。「ブロンローは当たれば大きいN線という危うい仮説に自分の科学者生命を賭け、そして負けたのである」（69頁／本項：橋本毅彦東大助教授）。なお現在の巨大科学実験道具（加速器、宇宙望遠鏡、スパコン）といった測定器ではなく、素朴な手作り実験機器であることに時代差を感じる。

## 進化論の否定

N線は実験失敗だが、イデオロギーによる否定も多い。ダーウィン進化論がズバリそれである。チャールズ・ダーウィンは最後のルネッサンス人ともいべき科学者で、本書でも「田園生活の憂鬱」（本項：齋藤光京都精華大学講師）とエキセントリックな作家サミュエル・バトラー（1835-1902年）との論争が紹介されている。サミュエル・バトラーはユートピア小説『エレホン』で知られている、ビクトリア朝偽善への反逆者で、牧師の息子ながら（こそか？）反宗教に傾いた。最初はダーウィン信者だったらしいが、ある誤解から批判に転じ、「ダーウィンの無視は、バトラーの怒りに油を注いだ」（248頁）「ダーウィンの規則正しい生活を取り巻くビクトリア時代的な取り澄ました雰囲気故」（244頁）としている。交通事故のような、とんだ災難だった。

十九世紀はともかく、二十世紀でも進化論は宗教絡みの批判を受ける。「進化論のプリンスの＜受難＞」（本項：下坂実東洋英和短大助教授）は、古生物学者スティーブン・ジェイ・グールド（1941年／ハーバード大教授）の学説が進化論に反対する「創造論者に勝手な解釈されて利用された事件」（72頁）。米国のファンダメンタリストの進化論否定は教科書・科学教員裁判と執拗で、国民の四割が進化論を否定している。ファンダメンタリストの「想像的進化論」は厄介かつ裁判戦術も巧みで、「正統的進化論のどこかを批判する＜創造的進化論者＞に利用されてしまうことが科学者を委縮させた」（81頁）。進化論が未完成ゆえにやっかいな問題である。

パスツールの言葉にある「科学に国境はない、けれども科学者に国境はある」、あるいは1920年代の物理学者の汎ヨーロッパアンが戦争によって分断されるように、科学も政治や価値観に大きく左右されることを本書は示してくれる。